

人文学部プロジェクト活動

人文学部は、以下のプロジェクトに戦略的経費（研究プロジェクト助成）を配分しています（右は代表者名）。

刊行物助成

英語と英米文学	太田 聡
独仏文学	下寄 正利
山口地域社会研究	速水 聖子
山口大学哲学研究会	柏木 寧子

『英語と英米文学』

『英語と英米文学』は、山口大学人文学部・教育学部・経済学部・国際総合科学部・教育支援センターに所属する教員グループが、年1回刊行している学術研究誌である。メンバーは現在13名で、このうち人文学部教員は欧米言語文学コース所属の6名（岩部浩三、太田聡、上田由紀子、池園宏、外山健二、カテリーナ・オリハ）である。掲載内容は各メンバーの日頃の研究成果を反映した論文等で、その領域は英語学・英米文学・英語教育・英語圏文化など多岐にわたっている。1965年に創刊された本誌は半世紀以上に及ぶ歴史があり、今年度で第58号の刊行を迎えた。そして、今号は「岩部浩三教授退職記念号」となった。最新号の掲載内容は以下の通りである。

1. On Unenhanced Scope in English Sluicing
(Yukiko UEDA : 人文学部)
2. Use of Hedges in English and Japanese: A Comparative Study of Empirical Research Articles by Native English and Japanese Writers
(Kayo FUJIMURA-WILSON : 経済学部)
3. Role of the Specific-Non-specific Distinction in the Acquisition of English Articles by Japanese

Learners of English and Stages of Article Acquisition

(Toshiaki TAKAHASHI : 教育学部)

なお、人文学部から配分された戦略的経費（研究プロジェクト助成）は、今年度の刊行・発送に要する費用の一部として有効に活用されている。また、本誌の電子版は山口大学学術機関リポジトリYUNOCAにより学内外に広く公表されている。これらの支援を受け、『英語と英米文学』は今後も継続的に各研究者の活動成果の公表に寄与していく予定である。

(太田 聡)

『独仏文学』第45号

山口大学独仏文学研究会が刊行している『独仏文学』は、ドイツ語文化圏およびフランス語文化圏の文学や言語学をはじめ、文化、歴史、社会、美術など幅広い分野の研究論文を掲載する学術雑誌である。当雑誌では、投稿論文の質を確保するため、2018年の総会の決定に基づき査読制度が導入されている。今年度、編集委員会は、学外の研究者3名に審査を依頼した。第45号に掲載されるのは次の3本である。

1. Michel de Boissieu : *Secrets d'une âme et Une page folle : donner un sens aux rêve – ou non*
2. 武本雅嗣：英語の非接触動詞の外的所有者構文について
3. 下寄正利：ゲルマン語強変化動詞第2種の歴史の変遷 (3)

(下寄 正利)

「山口地域社会研究」プロジェクト報告

「山口地域社会研究」プロジェクトは山口地域社会学会の研究活動を中心としており、現在に至るまで、例年2回の研究例会の開催、ならびに年1回の学会誌『やまぐち地域社会研究』の発行を継続して行っている。研究例会は、会員によるそれぞれの研究発表を毎回2~3本ずつ報告する形で行われ、活発な意見交換がなされている。人文学部の現教員は横田尚俊・速水聖子（現代社会学）、高橋征仁・桑畑洋一郎（社会心理学）、谷部真吾・小林宏至・山口睦（民俗学・文化人類学）の計7名で、社会学コースの教員全員が学会員である。さらに、経済学部や教育・学生支援機構、時間学研究所所属の教員会員のほか、大学院人文科学研究科（修士課程）と大学院東アジア研究科（博士課程）の学生会員もおり、例会は教員のみならず大学院生の研究成果発表として大きな役割を担ってもし

る。

2023年は、対面での開催は7月の例会のみであり、11月の例会は会員の都合により見送られた。

第54回研究例会は7/29（土）に人文学部小講義室で開かれ、「SNSをめぐるフェミニズム議題の変容」（山口大学大学院人文科学研究科 屈融）、「山口県の香典の実態と変遷—山口県文書館所蔵資料の検討—」（山口大学 山口睦）、「ホップズの秩序問題における〈家畜化〉のメタファー」（山口大学 高橋征仁）の3本の報告がなされた。

例会はフロアも交えて活発にディスカッションが行われた。今年度の研究例会の成果を踏まえて、年度末に学術雑誌『やまぐち地域社会研究』（第21号）を刊行する予定であり、現在、編集作業を準備しているところである。

(速水 聖子)

『山口大学哲学研究』

『山口大学哲学研究』は、山口大学哲学研究会が毎年刊行する会誌である。山口大学哲学研究会は、山口大学に所属する哲学・思想系の教員を中心とする組織で、会誌の刊行のほか、合評会、研究発表会などの活動を行っている。現在、正会員（学内の常勤職員である会員）は12名で、そのうち人文学部の教員は、ジュマリ・アラム、伊藤裕水、柏木寧子、栗原剛、藤川哲、村上龍、横田蔵人、脇條靖弘の8名である。他部局の正会員は、田中智輝（教育学部）、山本勝也（経済学部）、小川仁志（国際総合科学部）、小山虎（時間学研究所）の4名である。また、名誉会員（過去に山口大学に所属したことのある学外の会員）は22名で、そのうち人文学部の元教員は、上野修、遠藤徹、加藤和哉、木村武史、周藤多紀、武宮諦、田中均、外山（松本）紀久子、林文孝、古荘真敬、頼住（佐藤）光子の11名である。2023年度は、柏木寧子（人文学部）と小山虎（時間学研究所）が運営

委員を担当した。

本年度も例年通り会誌『山口大学哲学研究』の刊行を続けた。2023年3月（昨年度）刊行の第30巻は、年度をまたいだ2023年4月、会員諸氏・諸機関宛てに送付した。掲載論文等は、「トマス・アキナスにおける徳のモドゥス」（周藤多紀）、「『今昔物語集』天竺部における釈迦仏入滅の理解」（柏木寧子）、「非存在主義に基づいたアイデア論解釈：最初の試み」（脇條靖弘）、「バルクソンの「持続」における「回顧性」の契機：ジャンケレヴィッチ、メルロ＝ポンティを手がかりに」（村上龍）、「研究ノート」香月泰男『画家のことば』索引（2）（藤川哲）の五本である。刊行に際し、人文学部より支給された「刊行物助成経費」を、印刷・製本費用の一部に充てさせていただいた。また、第31巻は2024年3月刊行の見込みであり、栗原剛、伊藤裕水、柏木寧子、村上龍、藤川哲（掲載予定順）の各氏による研究論文等の掲載が予定されている。

（柏木 寧子）